



大正二年十二月廿三日印刷
六年二年十二月廿五日發行

〔定價三錢〕

長野縣四筑摩郡福嶋町四〇四番地
編纂兼發行人 安井正夫
上水内郡岸田村字中御所八十番地
印刷者 田中彌助
長野市西后町乙廿一番地
印刷所 長野新聞社活版部
長野縣四筑摩郡福嶋町二八九番地
發行所 蘆澤書店

岐蘇林友 第五十號目次

木曾御料林 田中木曾支廳長
米子青年會植林事業由來
真延詣附身延の林業
文苑
鞍馬行、消燈後、T君へ、
水さならめ
雜報
校友會記事、其他

講演

木曾御料林

田中木曾支廳長

本會は十月廿日本校に於て第十三回信濃山林會開催の
節田中支廳長の講演せられしものなり

段々有益なる御話がありました。私が私は此處へ出ましても別段諸君の御爲になるやうな御話も申し上げられませんが、御話申し上げやうと思ふのは茲に掲げてありますやうに「木曾の御料林」と題するものであります。此附近の御方には已に御承知のことと存トますから、嘸お聞きまだるいでしようが、他の地方の方々の中には未だ御承知の無い御方も未出でしやう。殊に明日は森林視察旅行をなさるのでありますから、此處で其準備と

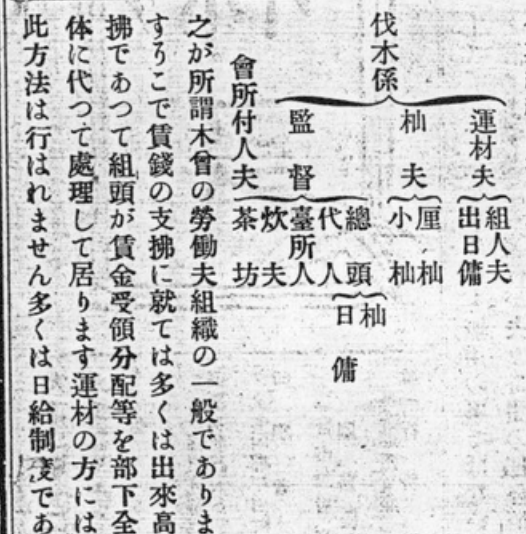
してこの話をするのも無用の事ではないと信トます。又この旅行が夫々時間の都合がありまして途中で完全に御説明申上げることが出来ませぬ殊に細い道のことでありまして後から来る方を待つて居つて御話をしなければならぬのであります。故に、まず時間の不足を來たしますから實地では系統的には御説明申上げることが六ヶ敷いられ故に此處で大略かいつまみまして御話致さうと思ひます。エ、後に山林局長閣下からも御話があることですから私はなるべく簡単に致しますが未だ三時でありますから大分時間もありません。暫く御辛抱を願ひます。木曾の御料林と申しますると、我國第一の森林或は世界に無比の森林であると言はれて居ります。吾々は此局に當つて居るのは誠に光榮であります。しかし實際に當つてみますれば世間の想像するほどでないの

であります。其實況は明日御覽になれば直にわかることとありますが、明日御覽に入れる處は尤も好い處であります。から之を以て直ちに木曾御料林を推すことは出来ないものであります。木曾御料林を正直に紹介してみますれば驚くべきものが二つあります。第一面積といふものは世間では百万町歩少くも三四十萬町歩あるものとして傳へられて居ります。然るに之を實測した結果は十萬五千町歩であります。之が第一に驚くべきこととあります。第二には山はどんな形をして居るかといふに地形は頗る悪しく、岩石地等も澤山あつて好い處は極く一小部分しかないと云ふ状態之を放つて置けば直に崩潰してしまします。又岩石が非常に露出して居るなか、造林するのに容易のことではありません。之を東北秋田邊の國有林に比較してみますと地勢に於て非常に劣つて居るので

ある之が驚くべきことの第二であります。併し只茲に一つ優つて居るのは樹種が少し他のものよりすぐれて居ると位置が東西兩京の中間であつてしかも木曾川の流は直ちに之が伊勢の海に注いで居る川の川口に名古屋といふ大市場を控へて居ることであります。他に於ては余り誇つて紹介するほど優つた處がないといふ事を申し上げなければなりません。そこで木曾御料林十萬五千町歩と云ふものは如何なる方法で施業せられつゝあるかといへば先づ事業區といふものに區分せられます。木曾御料林は二十一の事業區に區劃せられ事業區毎に所謂施業案を設け輪伐の計畫を定むるのであります。そこが如何いふ手段をもつて輪伐されて居るかと言へば輪伐は百二十年で全部を一通り伐り終る様になつて居ります。併し木曾御料林には特種のものがあります。それは昔からの仕來りとして畏くも伊勢大廟の御造營木はこの御料林から伐り出す事になつて居ります。之は容易ならん事でありますから如何なる事でも打捨て致さねばなりません。のみならず大木を要することでありまして百二十年の輪伐ではこの大きな木を得ることが出来ません。故に之に對するものに約五千町歩の面積をあてゝたかねばなりません。残る約十萬町歩が輪伐を行ふ處でありまして故に年々伐採する材積が約百二十萬尺となるわけでありまして今日で

はなかくううは伐つて居りません自分の手で即ち官業としては四十五萬尺立木の儘で賣つて居るものが十八萬尺。其れが材でありまして其他燃料として二萬尺を伐つて居ります。現在では合せて七十五萬尺を宛伐採して居るのであります。未だ四十五萬尺といふものは伐り不足して居る譯で現今ではこれにまでは手が届いて居らないのであります。四十五萬尺は自分の手で伐るのであるが之は先自分で入夫を雇つて伐り出すといふ状態でありまして此官行事業は木曾獨特のもので勞働夫の特種の組織から成つて居ります。木曾の御料林は美林であるといふ事よりは其伐るといふ事が昔から非常に御料林の名を世上に喧傳せしめた所以ではないかと思はれます。今其組織を表はして見ますれば

ります之が即木曾御料林を余程名高くして居る組織であつて此組織なるものは容易に直すことが出来ないであります。代木事業は春の早い處は三月乃至四月の初旬にはトメ入夫は山へ行つて小屋掛をしめて伐木に着手するのであります。そこで之に着手する前に腰柳は山割りをして各入夫に割付を致します。日備の總頭や柳の總頭は多くの入夫を指揮監督するものであります。該總頭なるものは實際手腕があるので他の入夫は其指揮に嫌なしに服従するのであります。斯の様に伐り出した材木は柳總頭又は代人が事業係員監督のもとに柳夫立會の上其材木を規定の寸法に照査し造材の善悪を檢定し之を受理する之を山本檢尺といひます。造材賃は此材積を基礎として計算し定めるのであります。それから運材夫の範圍であつて先づ第一に山落しに着手します。山落は四五月頃に始まつて九月頃に終ります。其方法としてはボサ抜きを第一に致しまして次に木寄せを行ひ其處からせり出し修羅棧手等の裝置に依つて適當の地点に送り出すのであります。之は林地を荒廢させぬ方法であつて多くの山落は林地を直接に轉すために之を荒廢させることが甚だしいけれども此方法に依ればうらういふ憂はありませぬ。是が木曾の山落の特徴であります。こゝにふ風に山落しをして送り出した材木は堰によつて之を流し木曾川の主流に送ります之



を小谷狩と云ひます。本流に出た木材は更に管流によつて錦織に輸送します。之を大川狩と稱へます。尚ほ小谷狩を行ふ或部分には鐵道運搬や鐵索運搬馬車運搬をも行ふ事があります。只今では山落しはして居りませんが小谷狩を行ふて居ります。又大川狩に類した小谷狩をも行ふて居ります。明日旅行します途中には大川狩に類した小谷狩を見ることが出来。明後日小川へ出ますれば純粹の小谷狩を見ることが出来ます。それから一つは植林であります。植林の歴史はなかなか古くあつて昔は村落に對し漆を植へた社寺の裏山などには多少の植林が行はれました。が藩の山民有の山には殆んど木を植へるといふことがありません。降つて明治になりまして廢藩置縣の結果尾州藩が其所有權を返上した結果全部國有林となつて茲に多少の殖林が行はれました。越つて明治二十二年三月には國有林であつた木曾山は帝室の御料となり殆ど伐り出すばかりでひどく荒廢しました。けれども其後保護手入が加へられる様になつて幾分此荒廢を恢復致しました。従來御良木のみを伐り出し後は其儘に捨て置きました。から今日行つて見ますれば相當の林相をして居るところでも雜木のみの林となつて居るのであります。然して今日では殆んど雜木を除くのは利用せられ尚ほ殘木をも伐り拂つてしまひます。からどうして植樹の必要が起るのであります。大抵其翌年

直ちに植へるのであります。除程の事情があつても三年以上打捨て置く様な事はありませぬ。伐木事業なる業はさ程困難ではありませぬ。吾々が最も頭を費すのは植樹の事でありましてそれ故に此方面には常に周到なる注意を拂つて居ります。概して木曾山には岩石地が多く從つて山の形が甚だ悪くしかも笹が多いのであるから造林事業の困難な事は諸君の想像以上だらうと思ひます。御承知の通り寒地であります。から造林の期間が甚だ短く又既に植へたものも冬の寒氣のため枯死するものが多くあります。うれ故に苗木に對しては常に周密なる注意を怠らぬのであります。そこで苗木の多くは自ら苗圃を拵へるを山に植へるといふやうに随分頭を使つて居ります。うれどうして今迄より以上の山を造り上げたいといふのは吾々局に當つて居るもの、願望であります。木曾の伐木事業は随分世に喧傳せられて居るのであります。吾々は寧ろ造林事業の方に苦心慘膽たるもの、あるのを感ずるのであります。造林のことは明日よりの旅行で實地に御覽になられたい旅行で御目に觸れる處は稍々以前の造林地で近年の造林地は未だ極めて稚さいもので御目に留るほどのものではありませぬ。之に就ては多少非難の点も御座いませう。が其苦心の跡を御覽を願ひ度また併せて充分の御批評を願ひたいのであります。細い事は實地に就て申し上げ

米子青年會植林事業由來 (本會は先般林業教育展覽會の節寄贈に係る、此に採録して參考に供す) 上高井郡仁禮村大字米子は戸數百五十戸人口六百を有する一部落にして千六百五十餘町歩の山林原野を有し部落民一般に林業思想漸く發展し此林野に對する施設經營に志し先きには仁禮尋常高等小學校米子分校敷場校舎増築記念林及び日露戰爭記念林を造成し或は軍人の植栽に係る日露戰役記念林其他の植林等二十餘万本を植栽し今春又々御即位記念林を造成せられたり故に吾青年會に對しては克く共同して贊助せらるゝを常とす。即明治四十年吾青年會が植林事業の經營を企畫するや直ちに區有山林を無償貸付し加ふるに立木全部を寄與せらるゝに至れり。經始爾來爰に六星霜現存植樹數四千四百本也 事業計劃順序 上高井郡仁禮村大字米子字米子山小字御所の平 山林面積拾町歩 一、本山林は大字米子部落を去る二十町の所米子瀧不動道山之神の南方に位し地勢概して峻ならず全面積雜木林にして毎年新植すべき區域内の立木を採伐し其跡地

に杉苗を植込む
一、毎年植栽すべき區域は其前年秋期に地
を拵を爲す四月の交新植をなす
二、植栽方法は方形植栽にして平均坪一本
とす
一、補植は新植の翌年春季之を行ひ手入は
毎年七月農家の休日を利用して之を行ふ

米子青年會植林事業定款

第一條 米子青年會ノ基礎ヲ鞏固ニシ安全
ナル發達ヲ企圖センガ爲メ植林事業ノ經
營ヲナス
第二條 植林地ハ仁禮村大市米子區有地字
米子山ハ字御所ノ平ニ設定ス
但拾町歩

第三條 本植林ハ紀元第二千五百六十八年
(明治四十一年)ヨリ向フ二千六百三年
(明治七十五年)ニ至ル滿三十五ケ年間
連年植栽スルモノトス
第四條 植栽スベキ苗木數ハ毎年(杉或ハ
落葉松)二百本乃至三百本トス
第五條 植栽苗木ハ毎年大字米子區ヨリ供
給ヲ受クルモノトス
第六條 本植林地ハ植栽順次十ケ年間確實
ニ手入ヲナスコト
第七條 本植林ハ一期ノ植栽終了シタルト
キハ植栽順序ニヨリ伐採スルモノトス

第八條 伐採ノ際ハ本植林地借入料トシテ
米子區へ該所得ノ十分ノ四ヲ納付スルノ
義務有ルモノトス
第九條 本植林地伐採ノ收得金ハ本會基本
財産トシテ蓄積スルモノトス
附 則
第十條 本事業經營上役員ノ責任ハ米子青
年會規則第十四條ヲ適用ス
第十一條 本會事業經營上會長副會長及幹
事ハ該事業ニ關スル一端ノ事務ヲ掌理ス
右明治四十年九月十五日決議

米子青年會慈善基
本財産造成法規定
第一條 植林地雜木ノ賣却ヨリ生ズル金額
ヲ慈善基本財産トシテ蓄積スルモノトス
第二條 植林地ノ雜木賣却法ハ每一ケ年植
林ニ必要ナル面積ヲ區劃シテ賣却スルモ
ノトス
第三條 植林地ノ雜木ハ本會ニ於テ如何ナ
ル事情アルモ全面積ヲ一時ニ賣却スルコ
トヲ禁ス
第四條 本會員ハ春季植栽ニ出張シタル時
薪一束秋季手入ノ際ハ青草各自一束宛ラ
持テ來ルコト
第五條 薪及青草ハ共同賣却シテ其ノ收益
ハ蓄積スルモノトス
第六條 本會ノ慈善基本財産ハ郵便貯金(一
或ハ銀行預金)トナス

第七條 本會ハ前各條ニ依リ慈善基本財産
ノ造成センガ爲メ會員中ヨリ基本財産造
成委員三名ヲ選舉シテ一切ノ事務ヲ擔任
セシム
但委員ノ任期ハ一ケ年トス

米子青年會慈善基本 財産使用規定

第一條 本會基本財産ヨリ生ズル利子ハ左
法ニ依リ使用ス
第一項 會員中天災地變ニ依リ一家ノ生
計ニ困難ナル者ヲ救助ス
第二項 會員中火災ニ罹リタルモノヲ救
助ス
第三項 軍人ヲ優待スルコト
第四項 會員中ノ力農孝子及特志者ニ對
スル賞與費

米子青年會慈善基本
財産特別使用規定
第一條 基本財産ハ本會ノ決議ニ依リ左記
場合ニ於テ財産ノ三分ノ二迄使用スル
事ヲ得
第一項 備軍備兵ノ必要アルトキ
第二項 本區ニ於テ非常特別ノ金子入用
アルトキ
第三項 會員中生活スル能ハザル者ヲ救
助スルトキ

第七條 本會ハ前各條ニ依リ慈善基本財産
ノ造成センガ爲メ會員中ヨリ基本財産造
成委員三名ヲ選舉シテ一切ノ事務ヲ擔任
セシム
但委員ノ任期ハ一ケ年トス

身延山詣て

附身延の林業 宮崎 惠 喜 太

鼓打つこの山里と詠トけむ身延の里富士川
のほとり法華經仰とにはあらねど小閑を
得たる秋日和の心ちよきま、漂然身延に歩
を運びしは月の五日午后なりき西日をあび
つゝ富士川の邊を縫ふて進む二時き餘りに
して愈々此の山の第一門たる總門に着きぬ
昔は此邊より奥森寂として春の晨秋の夕も
のゝあはれは多かりつらんも今は燭暗の風
情求めても尙得ず電燈の燦き殊に門前のア
ーケ燈に至りては却つて俗めいたり茲より
北する事約二町大平橋に至り山を眺むれば
峰の紅葉いつしか色深く潺湲橋下を洗ふ水
心清き流れに影を移せば名にしおる瀧田川
の水上もかくやと疑はれぬしはし風光を愛
で、後商戸農家の駢列する狐町を通り三門
近くなる玉屋旅館に案内を乞ひしは黄昏時
なりき沐みを終りて食事を済ませ明日のこ
ととも豫想して臥床に入れど隣室の客の聲
煩さく又四六時中絶ゆる間なき法鼓の音は
峯に轟き谷に響き耳にも響き暫くは夢も結
ばれざりき
翌朝結束して出づ山門に至り見れば巍然と
して高く地を抜く事七十餘尺梁間十三間奥
五間餘の大建築物にして二王尊を奉安す
門を通りて五六十歩すれば菩提梯と呼ぶ石

階あり蒼鬱たる巨杉に挟まれながら天に
昇る如し其高さ六十間礎を疊む事二百八十
七に及ぶ登りつめれば本院諸堂の有る所受
付事務所に至り小憩の後案内を得て回廊を
旋り祖師堂に至れば十三間に二十四間の大
堂閣金色燦爛として見る目もまばゆく整然
たる百餘の經机は紅蓮の花を散せるに似た
り正面の寶龕に奉安せる祖師日蓮の靈像は
彫刻第一日法上人が一刀一呪入神の技を揮
ひ英魂宿れと許り誠心籠めし妙作として扉
開け緋の帳捲き上がると共に儼然として現
はる有様は參拜者をして思はず襟を正さし
む辞して役僧に廊を導かれ眞骨堂に至る
拜殿は五間に六間あり奥に進む事十間すれ
ば八角の寶藏あり内に金を鏤め銀を刻り珊
瑚の天蓋瑪瑙の瓔珞紛飾の麗人目を眩す其
中央臺上の寶龕内水晶八角の玉塔に日蓮の
靈骨を納む去つてもと來し廻廊を引返す途
中釋迦堂位牌堂大客殿何んぞ稱ふ所を瞥
見し更に改め今度は某僧の案内により書院
と云ふに入れば兩入側は十四疊敷づゝ奥は
十五疊三間にて上座の間の床繪及襖繪は皆
悉く古法眼元信の筆の床上の香爐は古雅
掬すべき珍器なり此書院は法主が信徒に對
面し又妙經を頂戴せしむる儀式を行ふ所と
す
辭して精師堂裏手より鬱鬱たる巨杉數限な
く生茂る中羊腸の急坂を辿ること五十町に
して奥の院に達す二王門前には二本の老杉

蒼蔚として天を摩し殊の外人目をひく宜な
り之れ日蓮唱題三味手植に係るもの蓋し六
百五十年の星霜を経たるもの也門を入り拜
殿に至れば横七間半に桁四間具奥に方七間
の本殿あり輪奐の美結構の壯を極む内陣に
は一木三牀の日蓮が靈像を奉安し兩側に御
兩親及び大老僧の像を合せまつる今少しく
此の奥の院につきゆかりを記さば日蓮九ケ
年の間身延の澤に住したる節海を抜く事五
千尺なる此高きに折々攀ぢ登り牛國房州の
亡き兩親の方を拜したるとかされば思親閣
又は育恩堂とも名づく日蓮入滅の翌年即ち
弘安六年此處に思親靈蹤の紀念として庵を
建てたるを原とし今日に至る
既にして禮拜し出で、崖上に立ち眸を放て
ば長天雲消れて眺望限りなく富士の高峯は
云はずもがな東方遙かにながむれば伊豆相
摸の山々を越えて一筆ひける淡墨の如きは
房州の岬ならんか其爽絶快絶自然の浩氣に
打たるしはしよとの急坂を何んの苦もなく
飛び降り三門の所より右折橋を渡り數十級
の石磴を拾へば往古の神聖史を語り顔なる
老樹亭々として鬱蒼たるあり青苔の石に蒸
る空地を花崗石もて十間四面の玉垣を環ら
し屹然中央には七字の題目を浮べたるたけ
二丈にあまる大碧銅を立つ是れが昔の身延
山入遠寺かこにして即ち祖師草庵の舊跡な
り
見る所尙多かりつれど夫等は後日に譲らば

翼然として壯觀の結構成る即ち今の本院の在る境域是れなり越えて文政七年の秋諸堂悉皆火災に罹り珍器寶物の烏有に歸したるもの多し而して漸く諸堂閣の再建せられ舊觀に復せんとして復明治八年回祿に遇ひ洞然緒土に化す然れども挽回復興に助め高堂傑閣輪奐として面目を一新し又一方信者の登山参拜するもの年一年と増加し今や四季を通じ二十萬人と誅せらる

さて之れより筆を改め身延の林業につき語らんとす

吉野の如く美林ならず木曾の如き秋田の如き目を驚かすべきものならずと雖も一寺院の信徒等により盛んに經營しつゝあるに至りては蓋し國中冠たるものならんか

抑も身延山四十二世の住職日辰上人は世を重ね年を経るに隨ひ此の山の益々荒廢するを痛く歎き寶曆十二年殖樹十徳といふをものせられ曰く三寶恭敬 三寶供養 三寶尊重 三寶渴仰 三寶讚歎 靈場莊嚴 伽藍要用 佛神歡喜 見者生信 宿植徳本と又山中植込願なるものを置文して曰く「前文は煩なれば畧す」山林森々繁り合松、柏、杉、檜、の大木諸堂伽藍を圍繞して園林雲を吐き高山日月を頂き誠に眞の靈山事の寂光と諸國參詣の者の目を驚し信心肝に銘す

身延の林業

安國論と名づけ執權職北條時頼に奏す時頼之を見て甚だ快からず

かくて日蓮は益々大法弘道の銳鋒を揮ひたれば大小の諸難種々の迫害は襲ひ來りて一たびは伊豆の伊東に流され又龍の口の刑場に一命を預せんとし兩たび佐渡に放たれ四年の後漸く赦されて鎌倉に還りつれど執權北條氏は依然日蓮の教義を信じ用ゆるも暗にねば蕭寥閑靜の山林にのがれんと思ひ定め豫て南部氏との約束もあればとて文永十一年五月鎌倉を立ち波木井の郷に着ける實長大に歎び日蓮を迎へこころしこと山の麓の平地あるを認め此處こゝ好適らんと三間四面の庵室を造りたれば茲に入りぬ是れ實に日蓮の歳五十有三なりき

石多く山には瓦礫より外には物もなし冬は雪に道を塞ぎ夏は草生ひ茂げり鹿の遠音恨めしく蟬の鳴音喧し」と蓋し六百五十年の古と今とは自然の光風戀移は免かる可からざるも流石に日蓮自ら釋尊の住み給ひけん天竺の鷲峰山と我朝此砌に移し置きぬと稱ふ

身延の山をが地勢の雄大にしてかつ深遠幽谷なる以て察すべし而して蕭然たる茅茨の下日蓮は門人二三子と霧立ち嵐はげしき折も山に入りて薪を採り露深き草分けて谷に入り芹を摘み山河の流も早き岩瀬に菜をすゝぎ袂しほりてちわぶる思は昔人丸が詠ける和歌の浦に藻蘆たれつゝ世を渡る海士も斯くやと思ひなごして庵の内に有つて終日實相の深理を論談し竟夜妙法要文を讀誦し觀念の床に夢結ひける

かくて時を経るに従ひ法運大に開け山又山の峻しかる身延の澤に日蓮の徳を慕ひ風を望みて來り集ふもの陸續相加へ到底三間四面の草庵の能く容る所ならねば弘安四年實長は庵の傍に地を坦し石を据ゑ新に十間四面の堂を營み初めて身延山久遠寺と稱し十一月二十四日を以て開堂の供養を行はれける是れ全寺の興起なりとす

爾後道統相續して法運益々開け茲に百九十余年を経て即ち第十一世日朝上人に至り西谷の地の狹隘を告げ宗門の膨脹と相副ねば別に曠濶の地を相し新に堂宇樓閣を造營し

やと南部を指して歸りつ

頂をあらため左に大畧身延山久遠寺の興起及沿革につき述べん

身延の地は昔南部御牧波木井郷に屬し南部六郎實長の領する處たり正嘉年中實長の鎌倉に在勤の折柄偶々日蓮に見ゆ法門を拜聴せんと請ひたるに日蓮莞爾として迎へ法華の妙法を説き聞せたるに道機忽ち發しつゝさきに利導を加へられ茲に師檀の契りを熱せり日蓮は貞應元年房州小湊に生る元福元年十二歳の時房州清澄の山寺に登り修學する事七年夫れより鎌倉に赴き其宗々の明師に問ひ尙夫れより比叡山高野山等に登り顯學奥旨を究め建長五年齡三十二才の時東雲の空朗らかに旭日東天に輝き登り給ふ時旭日に向ひ舉めて妙法を唱へ宗旨を建立す所謂日蓮宗也當時天下は早魃魃續き田畠涸れ乾いて大飢饉の折又もや大地震起り爲めに家屋の倒壊人畜の死する者數知れず加之疫癘流行し万民歎きの中に康元正嘉の年も暮れ今年正元年の春歳改まれど壽き祝ふ聲もなく國中民の食盡き往き倒れたる人の肉を噉ふ此世からなる餓鬼道の飢ゑに苦み堪へかねる様目も當てられぬ振舞に日蓮あまたゝび歎息し近來の凶變時運にもあらず天災にもあらず全く法華經流布の時節なるを諸宗の邪義に障へざられて正法の立たざるを天怒り地罰すなりいでや此事譚を鎌倉殿に訴へ上げんと一卷の書を綴り之れを立正

るばかりなり併ら今一際達入て熟々と之を思は古來より簡程迄廣き山を植込の世話少く伽藍棟數多く諸造營際なきに似合ざる油断の様子伽藍等目通りには大木數多有る様なれども能々山中を見渡せば空地同然裸山も多くして繁り込の所も異荆逆木雜木多く或は田畠を開き三寶の淨界を穢し或は修覆造營には當然にも困苦する様なる事ども故願ふ所は植込也仰願くは一切の護法神等御報恩別して御眞骨御影堂高祖大士御報恩の御爲又は永代山の莊嚴の爲又は伽藍要用の爲今年壬午年(寶曆十二年を指す)相初め南方の鷹取山を植込にし末々山の用事に備へ度きものなり先は今年少々も植へ置き來年よりは年々春秋とも植木時分木苗一萬本宛毎年植置十年も二十年も三十年も毎歲植木の世話打續き有之様に向願なり又植ゆる時より外に年中には三度も四度も見分して介保養育を指加へ念に念を入れて植置事なり惣門の方の麓より他領の堺を限り應取の時七面山の方の境を限りに山下り三分も四分も半腹迄も植ばかりの植込にし其下通り谷合背通りには杉或は鹽子、檜、榎、弱檜等一所々に植置く様に願なり今迄有來の杉、檜は其儘立置松は太木は少々残し置くとも雜木或は植木の障をば皆倒し拂除て植込きものなり又奥の院の山にもぶななんとか云ふ用木にもならぬ雜木夥く見ゆるなり東照宮の杉山の續きに檜を植へて有を見

れば中々土地相應と見へて殊の外心能く生長する様に見る同雜木を倒し檜、杉を澤山植置度きものなり又追分より奥の院道の南表の山も皆雜木と見ゆる間檜、鹽子、樅、榎、弱檜等何程も植置度きものなり又追分登坂の杉山と東照宮の杉山は殊の外見分宜く參詣の者も風聽あるべけれども纔の杉山にて中々所用に立つ程の事は不可有又近郷近村より奇特の志しある者共檜杉等の苗年々少々宛運び諸堂の近邊へ植置き山役の者の世話にて所々大木の間にはさみ植へませて有之と雖も折節介保養育手入無之しては用事并目に立つほどの事は有るべからず向後數萬の植込を企て初めては年々植へ時見巡りを三度一年に四度の世話は高祖大士への御奉公なれば可勤答の役儀と思ひ面倒乍ら辛勞乍ら巡る時は一兩輩も召連或は枯抜の植へ更又は雪倒れか又は猪鹿狼などの損失を吟味して二十年も三十年も退轉無く相續して介保手入の世話をなし志念勇猛に勵むならば結構なる身延山園林寶樹と成て誠の宗門の大山天下の奇觀なるべし(中畧)

山高故不貴以有木爲貴異荆逆木雜木は多く繁りても山地を狭め費す計にては不貴可貴良材は万事に用ゆる徳勝れて見を貴しとしとする事なり何卒々々後代一向希奉願事は指次の貫主を始め老僧當番諸役僧脇座末々總衆徒中總門前中總トて山中の眞俗不殘異體同心に強盛の信心を以て高祖大

士へ知恩報恩の大功の立つ様に後々植木
手傳退轉無く志念勇猛の勳勵願入事也若し
此大願望相違無き時は未々百年二百年立つ
は夢の如くなり打續年々不退に植木の介保
養育山中に斷絶無ければ後々段々見事にな
り我此土安穩大人常充滿園林諸堂閣種々寶
莊嚴眞の靈山事の寂光眼前にして高祖の御
威光も日々に増し身延繁昌宗門廣布無疑
天下の歸依四海の渴仰不斜永代伽藍の用
木他所より求るに及ばず車力世話なく伽藍
莊嚴見分より諸參詣の信をまじ公所の聞へ
も宜しかるべし
第一檜苗澤山第三杉其次鹽子、弱檜、梅、
樅、桐、榎、蘭唐、松、唐松右有合相應に代物
にて求むべし若し志しにて寄進あらば望み
に任すべし勤むる事は不可有之來年の
苗は今年より誂へ置くべし随分付く様に代
出をして此方へ痛のなき様に取るべし
植人夫大勢は悪し、言大か五人には不可
過奉行は山役壹人加役當番にても外の院内
の僧にても可然植時は勿論介保見巡り時も
右の如き少人数にて念を入る事肝心なり
人夫は扶持を與ふべし二年に一邊通りは門
前を役に使可し足らずば頼んで使可し又他
村をも頼可し又木苗代は參詣の者に方丈に
て勸てとるべし二三錢は宛宛輕く十錢已
上は回向祈禱のある様に著帳すべし洗米に
ても遣すべし
鷹取山を初とし總べて山中植込になる木苗

の代なり
又竹藪竹林少き故所用に不足なり年中夥し
く大竹の入用有るに皆買調へて遣ふ故失望
多し何に程も竹藪の場所多きに古來より其
勘辨なく捨をき課す事笑止なり上の山の内
に場所能き處を二ヶ所も三ヶ所も大竹の種
を植へ置き竹の子時分には油斷なく番を付
る様に於て餘の雜木逆木何にでも障りに圓
るものをば拂ひ除て竹計り介保養育して氣
を付け段々と倍増する様にすべし大小の桶
類塀垣等足代種々用事に大竹少くて不叶
事なり總じて本院の内外竹木諸職人の遣ふ
程の物は勿論山中總体の様子見分ともに能
くき實質なる志の有る信心深き勤者を置
度ものなり厨司役山役普請方有と雖も末へ
長く永々の山の爲迄は中々勘辨あるべから
ず」と右の書は現に本山の寶庫にあり
之れに依つて之れを見る植樹の必要な事
より説き來り各場所につき如何なる樹種を
植栽すべきか實行に當り退轉なく志念勇猛
を以てすべき事を勵し苗木買入植付手入等
に至るまでの注意を細大洩さず説き去りし
用意の至れる感じの他なし
越つて明治の維新に際し約五千町歩なる全
山殘らず朝廷へ上地と成り彌々山野の世話
林樹の手入等疎遠に流れ園林莊嚴の美を失
はんか心痛の結果時の任職を始の信徒中
の有志金原明善伊東茂右衛門等外五名及び
近衛公爵松平細川徳川黒田各侯爵其他多數



鞍馬行

裏島浪人

何日か〜と思ひ乍ら途にも其機を得なん
だ鞍馬峽へ漸く此日曜に行くことなる連
れは純然たる木曾つ子の洋外へ寄宿の雲嶺
とである。

いよ〜今日といふ朝オイ仕度が出来たか
と雲嶺に寢覺を襲撃されて大狼狽で草鞋脚
絆に身を固め本町に待ちばけた洋外諸共イ
ザと許り誰が名づけらん行人橋を打渡つた
のが十月二十日の朝八時である。
豫定に一時間遅れたが〇〇が寢坊をやつた
からだなど互に打與ト乍ら早くも中畑
を過ぎて暫時御岳登山道と合せる王瀧道へ
入る。
今や蘇山のシーズンである道を蔽ふ黄葉紅
葉參差として洩れさす旭光に彌が上にも造
化の美を加へてゐる本多さんに見せたいな
あと洋外が叫ぶ。
間もなく合渡時に差しかる峠といつても
ほんの名前はかりで一坂登れば平坦なもの
だ稀に村夫子往き駄馬還るの圖は宛然桃源
の民を偲ばせる眼下を奔るは王瀧川で即ち
鞍馬峽は此上流にあるのだ。
尙前みて三岳の里に出づれば折から此處彼
處に霜枯の名残りを止むる柿餅の野邊を飾
るなど漫ろ山村生活が美しくなる。
行くこと數丁で名所常盤橋の紅葉がある深
碧の流水と相彩つて頗る鮮麗を極め當に遊
子の情を引くこと切なりだ。
幾許もなく又澤戸峠がある上下一里半と聞
く一軒茶店に憩ふて登るに路は左程峻でな
い晩秋を語る落葉を踏み分け〜時に東方
駒岳を遠望しつゝ懸て頂上なる知岳山遙拜
所にと達した。

鳥居の傍に一家があるが今は空しく蜘蛛の
巢窟となつて僅かに夏季の繁榮を誇つてゐ
る偶然落つた馬子六がト〜メガチを始め
て見たと喜んで行くなど朴醇の氣真に拘す
べきである。
下り路となり蛇行するに突如として蜥蜴風
葉の驚かすあり其都度雲嶺の肝最も戦々兢
々果ては後から石が飛ぶスラツキが飛ぶ逃
げる喚めくいやは滑稽千萬途に堪はず三
人等しく道の真中で抱腹絶倒したが側から
見たら又一段の喜劇であつたに違ひない、
かくて坂の半に至り我に歸つて瞰下すれ
ば遠く紫煙の山を逸した長流は蜃々として
向山の麓に迫り翠林と競ひ白石に映つて又
なき明媚を致してゐる。
恍惚として進むと不意に風を轉ぶ鄙歌の節
近づいて見れば薪拾ふ乙女達が余等を見る
や急に口を窄めて羞み乍ら行くも可笑しい
下り盡す所は即ち王瀧の里である。
一橋畔の立札に導かれて細流に沿ひ畑を越
へ徑を辿つて丘を降りると景色一變忽ち斷
崖前に現はれる物凄き迄に澄める深淵は其
下に湛へて先づ人をして冷寒を催さしめる
水際に立つて臨めば上手の巖巖稜々として
天を摩する邊より轟々岩を砕き白沫を飛ば
し來る流勢は恰かも蛟龍の下るが如く碧潭
に投じてゐる眼を轉つて仰げば兩岸の綠樹
は鬱蒼として深く其倒影を水光に蘸し紅葉
點々其間を綴るの勝景は眞に形容するに言

葉がないのだ。
一岩の上に此大自然を賞し乍ら行厨を開い
てゐると洋外が何處からか舟筏を泛べて來
る蓋し峽の眞景は之に依らざれば見れない
うだ余も亦續いて乗つたが河分生來初め
ての事とて一時はアヤフヤのスタイルよろ
しくであつたが然し須臾で慣れ却つて後には
泰然快哉を叫ぶ様になる。
尤も嘗て越後の大河で屢々舟遊したものが
與つて力あるのであらうして見ると何でも
覺て置けばいつか役に立つものだ向岸に
渡つて崖を攀ち竿に絶つて行くと果して橋
がある兩岸の絶壁相逼るの所に高く懸り其
下に流水の二三緩う浮ぶなど甚だ奇觀を呈
してゐる。
かくて俗塵の外仙境の嵐色に憧れてる内に
日脚短い秋の陽は何時か傾いてゐる眺めは
倦かねど是非がない行かう〜と二人に急
き立てられてせめてもの心遣りにと一度橋
上まで迂廻し數丈の水面をのびんとヒヤリ
と粟を立て〜潔く歸途に就く。
峠を越へ川を越へ再び三岳に出で〜一村家
に柿を求めると耳の遠い爺公がゐる若りに
柿を呼ぶのだ聲に應じて出て來るのを見る
とドツコイ六十位の親爺なので一同晒然と
した余等を名古屋の學生と思つてか福島は
萬屋泊りと早合点し出放題の宿料六十錢也
と聞いて高いなあと思嘆するなど全く罪が
ない。

既や四周は暮靄を閉して山の端の玉兔も次第に白くなるあはれ土産にと思つた紅葉の枝は手折るに由ない。

合渡峠を過ぎて月宵に渡る片山道に婆娑たる樹影を踏んで高らかに詩を吟じ校歌を怒鳴り乍らいつか木曾川を隔て、夜行の上りと逆に燈火煌く花の福島へと着く。

廣小路で洋外と別れ寄宿の門で雲嶺と別れて獨り東寛の前を急ぐと階上の一隅から遅かつたねと深美君が迎へて呉れる實に樂しき一日であつた。——二千五百七十二年

あゝ去年の今夜であつた市川原田の兩君と鞍馬行の歸り王瀧道に魔の様な樹影を踏み乍ら河津の渡る月を仰いで吾々は來年の今夜何處の空に此月を見るだらう御互に此夜の月を忘れるなと誓つたあゝあの言!

想へば萬感胸に迫るよ洋外は九州にあり雲嶺は關東にあり今彼等は如何に此月を見るか? あゝ月よ! 何ぞ多恨なる汝傳へよ北海の孤嶋に茫然として佇む一個の瘦浪人あるを虫の音川の流れ水車の響きは聞ゆれどあゝされど寂しい! 二年十月二十日夜十一時。

消燈後

△ △ 生

から小さいイビキの音がしてくる自分は自習で疲れてがんぐする頭をかへたまゝ腰掛けてこう仰いで取りどめもない冥想にふけて居る

テイ君へ

落 第 坊

T君よ 思ひ出して下さいよ あの毎朝霜柱のガサ／＼と倒れる頃の事は去年の今頃君はまだ寮生活を續けたいと云ふた 其の時分僕は早く此の箱の中の様な寮生活はぬけ出して一日も早く呑氣な生活をして見たいと云ふたね!

水とやならめ

すゐそん

T君よ 女々しいと笑ひ給ふな 自分は又やつぱり君の云ふた様な言葉を繰返して居りますよ 君の云ふた「其の 此にたけは分らない」との言葉を思ひ出しますよ どうせ卒業したつて世の敗殘者よ かし／＼君の所謂「其の身……」だらう 敗殘者は敗殘者としての苦しみもありましたよ 又樂しみもあるだらう T君よ 去年の今頃消燈後にあの爐を圍んで二人で種々と小さい聲でしんみりと話した頃を思ひ出して同情して下さいよ。

語るもやさしいさ、川清ききはみは水ならぬ水とやならめ我死なば岩にくだけて裂けて散り池立つ末の白しぶき高く吠ゆるや荒磯に寄せつかへしつ又寄する波は逆巻く沖遠み浮立つ嶋の影を追ふかもめは歸り舟は去る底ひも知れぬ籃籠の潮に黄金ちりばめつ残る夕陽の彩りも今はた淡く融け流れ波にくだくる月の影永くうねりて果もなし曉 近き 潮 風 の磯馴れ松の枝になり呼ひてさますや漁師の夢廣ききはみは水ならぬ水とぞならむ我死なば嗚呼 香冥の昔より幾億劫の末までも不増不減と湛へたる大海原の偉なる哉人幾世を更ふるとも時幾代を閱すとも水こゝろ久遠にかはるまど永劫のきはみは水ならぬ

水とやならめ我死なば。

雜 報

校友會秋季大會の記

木の枝に鳥が止るとか云ふ秋の暮も押しつまりの十一月二十九日我校友會の大會を開催せられた然し校友會の盛況は例の通りの旺盛で決して晩秋の悲哀や冬枯の氣味などは少しも籠つては居ない、殊に今日は研究部庭球部擊劔部相撲部とそれ／＼陣取つて何れ劣らつ負けまゝと割據虎視の姿である然し天氣の曇り氣味で何處やらヒヤリとする御岳風を見舞はれるには各部とも不安な疑視を放つてゐる殊に野天的の庭球部相撲部には尙更らしかつた。

とが市岡君の蠻聲など聽者をして電光石火の有様を想像せしめ得て餘蘊がなかつた。庭球部は涙涙を呑んで敗戰の事故語る塚田君も幾分日頃の達辯を沮害せられた終りに兩君とも將來の努力と奮勵とを希望して降壇せられた 愈々これからが本日の辯士諸君の舞臺である。先づ ◎學問に就て 二年 飯沼要人君 張り氣味の肩を擁して徐ろに壇上から一睨して開口、校舎の新築と學風の改善すべき諸點を列擧し殊に軟文學の物興を排し學問は小人となるにあらず君子たるにあり職員生徒眞に覺醒の時は來れりと警告する聽者中からのイェヌーノー! を受け流して悠然壇を後にした。君の高説に接したのは今回が初めてであるが中々素破抜分子に富んでゐる更に自愛自重せられよ。 ◎坪井伊助翁 一年 拓植五郎君 演壇を抱へて其の上話す處はお國自慢である「我岐阜縣の人士にて現在誇るべきは坪井翁と名和昆虫翁とである」と口をきり翁の逸話を説き終つたその態度は遺憾なく社的前生を表白してゐた。 ◎涙 三年 長谷川房藏 君の舌端には毎回接する突梯と滑稽酒 君の中に一道の理を含むこれが君の特長であるうれに回を重ねて妙境に入る趣がある又近頃詩的になつたやうだ題目が既に新体詩

的である。涙なきは禽獸にひとし喜怒色に表はさざるを東洋風の豪傑となすこれ瘠我慢の骨頂也偉人の涙は國家を築く」と叫び更に史上の熊谷、小楠公、重成等を拉し來つて涙の尊さを説き言を勵まして現代の偽涙は皆野心の雫なりと痛罵をあびせかけるこれには滿場耳を欬つて快を呼んでゐた。

▲此處で校長先生登壇聯合競技會につき満足の意を述べさて將來の發奮を希望せられた同時に昨日縣會の議題となつた本校國立問題に就いて生徒も職員も致戮力を要すると結び出演の約束あればとて直ちに數原なる青年會に向はれた。

◎忠君愛國 一年 開運隆飛登君

海行かば……と大伴氏の家訓から説き起し日本の國民皆兵を讀へ『發して萬朶の櫻となるの東湖先生の句を引照して大和魂を唱へ維新後西洋の文明否非文明が流れ込んで武士道が頽廢せようとしてゐると慨き問題の局面は愈々開展して國体を論じかの大逆事件を罵り倒した君は終始身体を斜にしあの凄いで眼で前方を眼鏡越しに睨み重々しい一言一句と心の底から發するやうな感歎詞は確かに聽衆をチャームした、君の演説には詩句が豊富であつた態度が憂國の士のやうに眞摯であつた。

◎人生の苦樂 書記 加藤安太郎君

前置きが中々に長かつたその中に昨日職員會で強制的に籤を引かせられ誠に非立憲云々

々々時節柄政治的色彩を帯びさて人生問題に入り生きると喰ふの關係や苦樂の變轉心の持ち方等を巧に道歌や詩句を交せて説破し最後に人生須く先づ苦しみ樂を後にし樂觀して向上すべしと結論を下した事理と云ひ態度と云ひ中々の老武者で前置は全部嘘であらうと思はれた。

◎木曾の秋季探勝 二年 篠田秀平君

落成式の慰勞休暇を利用した旅行談である南木曾城山の史蹟や田立の瀧の壯觀に付遺憾なく觀察し説明を加へて休日に徒らに暮すことなく須く名山大川を跋渉して心身を鍊磨せられよと論づつた、君は初舞台であつたが落付き振つたものであつた。

◎予は何故に炭焼をするか

北村 先生

先生の長廣舌には毎々接してゐるがこれは又近頃の大演説であつた喜色滿面壇上を縦横に踏んで長寛のやうな氣焔は例に依つて例の如しである。人情と苦樂を説き甘んとして苦楚するは馬鹿か氣違かもしくは大々の偉人なりといふ前提を置き備炭焼は世に賤業と目せらるゝを陳ト予は近親四面楚歌の裡にこの所謂賤業に従へりと訴へ今度は前提に歸つて然らば予は馬鹿か?……云々に問ひかゝり予は馬鹿にあらす氣違にもあらす去りとして偉人にあらす叫んで聽者を烟に巻きやがて烟を排したやうに炭焼は果して賤業か?と反問

を喰はされ暫時無言、先生徐ろに口を開いて職業の貴賤は實に従事する人格の如何にありと斷案を下し炭焼は實に化學工藝的の事業也、製炭改良は焦眉の急務也、苦業を絶對的のものならず等の結論で題目をて氷解させられた先生の演説は教訓もすよでをり事理も整然透徹してゐる。滿場の喝采の暫し止まなかつたのも無理ではないのである。

◎自由に進め 三年 齋藤海藏君

自由に進め自信あり主義あり満足ありて後眞の自由に進め次第に依りては文學可也、缺席可也と警句を吐く強い意志が閃いた、後はまだ三四人の蘇秦張儀が控へてゐたが正午か近い故遺憾ながら閉會した。(旨評多謝)(以下次號)

卒業生諸君に謹告

時下寒冷の候御壯健奉賀候就ては同級の友下如徳重君は朝鮮山府に於て大に活動されしも不幸病歿の憂ふ處となり不歸の數に入り候同君の將來に對し望む處多かりしに忽ち此凶報に接し誠に哀情に堪へず候就ては同君の靈を甲慰せんか爲め甲慰金募集致度候に付御贊助あらん事を希望致候追而御申込期限は大正三年二月末日限りとし御申込と同時に御送金相成度御送金は木曾山林學校内安藤時雄宛とし之が領收其他に關しては林友誌上に掲載可致候間右様御承引被下度候大正二年十二月十日 發起人 宮 田 信 實

廣告

新築落成記念事業に對し會員にして未だ御寄附無之諸君(此際至急御申込相成度)但し壹圓以上御送金と同時に記念品(寫眞帖一冊、記念簿一冊、繪はがき數部)贈呈可致候向會員に限り右記念品御希望の方へは實費送料共八十錢にて代金引換御譲り可申候間至急御申越相成度候尙、寄附申込者にして未だ御送金無之諸君は至急御送金を乞ふ 大正二年十二月 會 員 諸 君 校 友 會



謹賀新年

大正三年二月

木曾山林學校職員

- 安藤 藤時 雄
- 七宮 純雄
- 北村 正夫
- 新家 園面
- 島内 康明
- 林重 郎
- 大場 慎六
- 宮田 實
- 加藤 安太郎
- 征矢野 茂樹

論說

正社頭の杉

木曾山林學校長 安藤 藤時 雄

本年は、今上陛下御踐祚の後初めて新年を祝福する芽出度い年である國民と共に此の慶賀する新年に我皇祖皇宗の徳を慕ひ定めて元日の朝は鎮守の宮氏神の社に詣でる事であらう又此禮儀は一番大切な事で日本の國風を維持し祖先に對する崇拜の念を益々養成する事となる本年の御勅題には特に社頭の杉と云ふ題を御下しなすつたのである随分歌道に熱心なる連中は各々其の選に入る事を競て居るそこで吾輩も左の一首を神さびてたてる宮居の大杉は

大正三年一月廿三日印刷
大正三年一月廿五日發行

〔定價三錢〕

長野縣四筑摩郡福嶋町四〇四番地
編纂兼發行人 安井 正夫
上水内郡芦田村字中御所八十番地
印刷者 田中 彌助
長野市西后町乙廿一番地
印刷所 長野新聞社活版部
長野縣西筑摩郡福嶋町二八九番地
發行所 蘆澤 書店

岐蘇林友

第五十一號目次

- 論 說、社頭の杉 安藤校長
- 講 演、心理實驗、村上文學士
- 文 苑
- 試筆の詞、新年、此頃の氣分、和歌、
- 雜 報、山林學校傾倒、農業教育
- 研究會に於ける本校提出の議案及決議事項、校友會大會記、其他

大和島根のしるとやせん

勿論此道に拙なき者にて到底物にならぬがせめては御勅題に對して心に浮びたるまゝを記したので且吾人に最も必要な樹木の王とも云ふべき杉に付て少しく感想を述べて見たいと思ふのである

昔彼の有名なる西行法師は伊勢大廟に參拜して

何ごとのおはしますかは知らねども
かたじけなきに涙こぼるゝ

と歌つたと云ふ事であるが之は西行法師の感慨ばかりではなく恐らく日本國民たるものは皆之と同一の心理状態に接する事であらうと思ふ而して此感想の浮ぶのは同社の御本体が國祖にましますためは云ふ迄もないが加ふるに其の周圍の杉の太木が鬱蒼として森林を形成りて神々しさを添へて居るからである即ち大廟の境内に生立て居る杉